

戸川幸夫
奈落の恋人



和同出版社

奈落の恋人

定価二八〇円

昭和三十三年八月二十日発行

著者

戸川幸夫

発行者

磯部節治

活版印刷

新興社印刷所

平版印刷

伸光印刷株式会社

製本所

株式会社 自誠堂

発行所

東京都文京区
西江戸川町二

株式会社

和同出版社

電話(92)八六一二

振替東京七一五二六

奈落の恋人

目次

序	1
第一章	2
第二章	10
第三章	18
第四章	26
第五章	34
第六章	42
第七章	50
第八章	58
第九章	66
第十章	74
第十一章	82
第十二章	90
第十三章	98
第十四章	106
第十五章	114
第十六章	122
第十七章	130
第十八章	138
第十九章	146
第二十章	154
第二十一章	162
第二十二章	170
第二十三章	178
第二十四章	186
第二十五章	194
第二十六章	202
第二十七章	210
第二十八章	218
第二十九章	226
第三十章	234
第三十一章	242
第三十二章	250
第三十三章	258
第三十四章	266
第三十五章	274
第三十六章	282
第三十七章	290
第三十八章	298
第三十九章	306
第四十章	314
第四十一章	322
第四十二章	330
第四十三章	338
第四十四章	346
第四十五章	354
第四十六章	362
第四十七章	370
第四十八章	378
第四十九章	386
第五十章	394
第五十一章	402
第五十二章	410
第五十三章	418
第五十四章	426
第五十五章	434
第五十六章	442
第五十七章	450
第五十八章	458
第五十九章	466
第六十章	474
第六十一章	482
第六十二章	490
第六十三章	498
第六十四章	506
第六十五章	514
第六十六章	522
第六十七章	530
第六十八章	538
第六十九章	546
第七十章	554
第七十一章	562
第七十二章	570
第七十三章	578
第七十四章	586
第七十五章	594
第七十六章	602
第七十七章	610
第七十八章	618
第七十九章	626
第八十章	634
第八十一章	642
第八十二章	650
第八十三章	658
第八十四章	666
第八十五章	674
第八十六章	682
第八十七章	690
第八十八章	698
第八十九章	706
第九十章	714
第九十一章	722
第九十二章	730
第九十三章	738
第九十四章	746
第九十五章	754
第九十六章	762
第九十七章	770
第九十八章	778
第九十九章	786
第一百章	794

奈落の恋人

東おどり

五

花びらの蔭に

二五

狂い蝶

五五

くいしんぼ

七四

脅迫状

一〇三

太郎吉の悲恋

一二三

伝さんの怒り

一四三

神様になつた狼

東京の秘密

一三

犬は喰わぬが

一五

神様誕生

二〇

驚くばかりなり

二九

美女祈禱

三三

犬問答

三三

奈落の恋人

東 お どり

この一、二日は五月の末のような陽気で肌が汗ばんだ。それに天気もよかつたので上野や赤坂弁慶橋、九段を魁けとして東京の桜は一斉にパツと花をつけた。

そしてうきうきとした東京ツ子の心にさらに拍車をかけるように、新橋演舞場では恒例の春の「東おどり」が四月一日から絢爛と幕を開いた。

「東おどりなんて新橋芸者のデモンストレーションだよ」

などと悪口をいわれた時代はとうに去つて、いまでは東京名物の一つにさえなっている。春秋二回のこの踊りを見るために全国各地から上京する者も少なくなかつた。それは地方の花柳界の人たちが勉強のためにやつてくるのももちろんあつたが、最近では一般の遊覧客までがこの踊りのことを知つてやつてくるのだ。

「昔は特定のごひいき様が相手でしたが、最近はどうも家庭の皆様が殆どでございます。東おどり

も今日では単なる芸者の手踊りではなくて一般大衆の芸能となりましたよ」

と、新橋組合の役員がいうのもまんざら嘘ではなかった。

劇場にはいつもなら幟りがはためいている筈だが、この出し物の時だけは幟りは酒樽や大提灯に変わり、楽屋口に人力車がずらりと並ぶのも、夕方にはもう小屋がハネるのも花柳界の催しらしかった。

そういえば人力車などという前世紀的なものもこの街では——新橋花柳界だけが——実用的な乗物として通用していた。

その時は午後の九時か、十時だったろう。だから宵つばりの伊吹兵助にいわせるとまだほんの宵の口だった。彼はこれといった用のない時にいつもするように愛犬トリスをつれて浜松町のアパートを出るとぶらぶら歩きで築地の市場通りから、この築地川の川つぶちにやつてきた。溝臭い川だが夜はまだほんのちよつびり情緒をたたえていた。

ふと見上げると演舞場の建物が窓に灯もなく黒々と突つ立っていた。いつもならまだあかあかと川面に灯影を投じている筈の建物がまっ黒に立ちはだかつていると妖怪味さえ感じられるのだつた。

「おや……？」

兵助はちよつと考え、

「なんだ東おどりか……ほう、もう四月だな」
と呟いた。

呑ん気坊の彼には花も、踊りも頭の中にはない。あるのはアルセーヌ・ルパンやシャロック・ホルムス、それにコーヒーにトリスだ。

「一ぺん見てやるかな、立さんにも頼んでやろう」

と、彼はまた呟いた。彼とてなかなか究学心には富んでいる。新聞記者はつねづね八方に眼を配らなければいけない——ぐらいのことは論理的には知っているから、いまかかつている東おどりの「生々流転」と「かさね」が、評判を呼んでいるぐらいのことは耳にとめていた。

「ほんとに立さんを口説いてやろう」

とまた呟いた。こんどは本当に見たくなつたらしい。

立さんというのは、毎報新聞学芸部の記者で舞踊評論家としても名が通つている立村隆二の愛称で、兵助とは昔からの友達であつた。

立さんこと立村隆二氏は新橋花柳界では凄い顔であつた。

というと、いかにも彼が大尽遊びでもしているようだが、そんな意味ではさらない。第一毎報新聞の平社員の月給ぐらいで新橋で遊び廻れる筈もない。いやなにも毎報新聞に限らない、どの新聞社だつて、官庁、会社だつて招待様か社用様のお蔭を蒙らないではそうめつたに足のふみ入れられる場所ではない（出来たらそ奴は悪いことをしているよ）筈だつた。

立さんの場合は舞踊評論家だから、つまり東おどりを批判する立場にあつた。事実、批判だけでなく指導もしているので、

「先生、先生」

と立てられている——だから顔が利く——という「大風と桶屋」の関係なのである。

そもそもこの新橋演舞場というのは、新橋の芸者たちのか細き腕の力で創り出されたものであった。

いまの新橋組合の前身である当時の新橋五業組合が、新橋演舞場株式会社というのを作つて、大正十四年の春にこしらえあげた、いわば新橋芸者のための劇場なのである。その竣工を契機として、京都の都おどりを真似て、毎春、ごひいき様におどりを見ていただくことになった。これが東おどりの起原で、第一回の出し物は「色競東名所」という岡村柿紅作の十二段返しであった。

これというのも役員川村徳太郎の努力が大いに預かつているといわれる。関東大震災で新橋が焼野原と化した時に、川村は、

「新橋の復興は芸からだ！」

と、四散していた新橋芸者たちに呼びかけ、麻布十番に焼け残った南座を借りて第一声をあげた。

この踊りの会が「東会」で、ずっと続けられていたが、演舞場が出来てからは春は都おどり式の「東おどり」秋は古典物の「東会」を催すことになった。

新橋演舞場は戦災で再び焼けた。終戦になって旧い伝統の芸者の社会にも新しい風が吹き込んできた。二十一年、芸妓と芸妓屋との間にとり交された契約証書は全部破棄され、新たに東京新橋組合が復活結成され、同時に新橋演舞場は再建に着手された。

戦後第一回の東おどりは再建なつた新橋演舞場で、二十三年三月二十一日から八日間催されたが、出演者の数も少く、百名を越えなかつた。この時から東会を合併して東おどり一本として、春秋二回開催することになつた。震災にもめげず戦災にも崩れず立直ることの出来たのをふり返つて新橋の古い妓たちは、芸を身につけていることの強さをつくづく感じた。

菊石頭取は、

「芸者は芸で立つ者ですから芸を第一に考えねばなりません。その芸にもまた品がなければいけません」

と、いつも若い妓たちに訓えている——ということを、いつか立さんに聞いたことがあると兵助は思い出した。

「芸者、芸者というてもピンからキリまである。馬鹿ンならんもんじや」

兵助が独り言をいつて歩き出した時、トリスが立止まり、緊張して前方を見た。演舞場の蔭から黒い三人の人影がふらふらと出てきたからであつた。一人はがつしりとした男、そして他の二人はかなり年とつた婦人であつた。

三人の人影は大関の酒樽を積み上げた薬屋口から小声で囁きながら近寄つてきたが、向うも兵助とトリスに気がついたらしく、立止まるとじつとすかして見て、ひとりが、

「おう、兵さんじやない？」

と声をかけた。

「なんだ、立さんか」

噂をすれば影とやら……というが、相手はついさつきまで、兵助が考えていた立村隆二であつた。

「ちようどよかつた。実は兵さん。あんたに是非会いたいと思つてたんだ」

と立村は近よつてきて云つた。二人の婦人は後に遠慮して控えている。

「なんだね、改まつて……。僕も立さんに頼もうと思つてたが……」

と兵助は頭の禿げ上つたいかつい顔の立村を見て問うた。立村はそれに答えずに、後の二人の婦人をふり返つて、

「彼がいま話した伊吹兵助君なんですよ。ほらそこにいる、その犬、それがトリスといつてなかなかの名犬でね。テレビにリン・チン・チンという犬が出てくるでしょう、あれ以上なんだ」

と、説明した。二人の婦人は頷いて、兵助の前に進み出た。二人とも小ぶとりで五十五、六に見えるが花柳界の人らしく粹で、小ぎれいに作つてゐるからほんとの年は六十を越してゐるだろうと兵助は思つた。

「こちらは新橋の頭取の、有名な菊石千恵治さん。それからそちらが山田まんさんで……」

立村の紹介で二人の婦人は兵助に丁寧な頭を下げた。挨拶が終ると立村は千恵治に、

「ねえ、かあさん、今夜ここで会つたんだから、話しましょう、早い方がいいよ」と囁いた。

「そう？」

二人の婦人は兵助の方をちらと見て、

「でも、いきなりじゃあ、ご迷惑じゃない？　お願いするんだから改めてどこかにお越しを戴いて……」

それを立村が片手で押え、

「いや、そんな形式的な男じゃないから大丈夫ですよ。早い方がいい」

「そう？　そんなら、お願いしてみても……。妾たちは何しろお喋りは出来ても大切なことだと筋道たてて話せないんだから立さんからね……」

「そんなことはないけれど……でもまあ僕から話しましょう」

そういうと立村は兵助の方にふり返つた。

「何だい、立さん」

「兵さん、今夜、時間を少しくれないか？　忙しい？　どつかに行つて話したいが……」

「いや、今夜は別に……。だけど氣を使わなくてもいいよ。なんならここでも……」

「でも立話というわけにも参りませんから……」

とまんがそばから口を添えた。

「しかし犬が困つたね」

「いやトリスならいいんだ」

兵助はそう言うと、

「トリス、帰れ！」

と命じた。

トリスが命令を聞いて走り去ると四人は自動車を止め、料亭珍喜樂に行つた。この女主人の村木きくも山田まんと共に東京新橋組合の副頭取で、菊石千恵治こと人間国宝になつた菊原ふゆを助けて「新橋」を運営している利け者だつた。

三人の婦人たちは却つて自分らはその場に居ない方がいいだろうと席を外したので、兵助は立村と対で奥座敷に向い合つた。

新橋花街の名は、もちろん知らないわけではないが、一新聞記者の身分では足をふみこむこともないのでバーのプンケとはいささか勝手が違ふとさすがの兵助も落ちつかない様子だつた。

「立さん、何だね、話というのは……」

「まあ、ひとつ……それから姐さん、ちよつと遠慮してくれないか……」

立村は係の仲居を退らせると酒を注ぎながらぼつりぼつりと話した。

それはこんな話だつた。

東おどりは年々人気を集めるにつれ、その演し物については幹部の間で慎重に案が練られていた。それは春の東おどりが開催されているうちにもう半年後の秋の演し物の準備が進められているという案配だつた。

それほど準備を慎重にし、念には念を入れてやつても、思わぬ手違いを生ずることがあるのは止むを得ないが、この春のは少し訝し過ぎた。

まず最初の出来ごとは蓋あけの四月一日の第一部。——しかもその幕あきに起つた。

初日の出来、不出来はこの興行を通じての評判になるので、この日は新橋の役員も総出で緊張

していた。

第一部の最初は「浮世曆」で、桜花爛漫の春の日に、男女の花売りに娘たちが絡らむ美しい開幕舞踊だった。幕が上ると花道から菊野の扮する花売り男と東子の花売りの女とが登場し町娘の幹子、小高、杏子、まりえ、日出勇たちと、

へ名にしやまとの筆の花浮世絵姿おぼけなく、春のおどりの花ごろも、四季のながめの興添えて、色も香もある花暦花めしませと来りける……

の清元に合せて絢爛と踊り狂うのであつた。

観客たちはその美しさにうつとりとして眺めいつた。初日とはいえ、さすがに新橋の名に恥じない出来栄で、時間も忘れるほどだった。

へ花の色絵の丹精を、さす手、引く手にかりそめの……

へ召し召しませと触れてゆく……

さかえ、さと子、育代らの冴えた撥にのつて栄子、ひろ子、駒子らの淨瑠璃がふんわりと暗転する闇の中に尾を曳いて消え、幕がするすると降りて拍手が湧いた時だった。

ズシン、ドドンという大きな音が舞台で響き、キャーッという妓たちの叫びが起つた。

「何だ、何だ！」

と観客が騒ぎだした。役員たちは顔色をかえて舞台裏に飛んでいつた。

新橋組合の幹部たちが舞台のソデに駆けつけてみると口喧ましい女たちの集まりだけにきやアきやアという騒ぎだった。

「幕が開くんだよ。静かにおし……」

さすがに千恵治は貫禄をみせて皆を抑えた。天井に吊つてあつた大道具の綱がどうした具合にゆるんだのか、はずれて踊り子たちが清元に合せて、

「さす手、ひく手にかりそめの……」

「召し召しませと触れてゆく……」

と絢爛と引きこんできたとたんに、それを見ようとしてソデのところに集まつてきていた第二幕「生々流転」出場の芸者たちの上に落下してきたというのである。

ちようど踊り子たちが引つ込んでくるので、ソデの溜りの芸者たちがパツと開いたところで、そのわずかな所に運よくその大道具の戸は落ちてきたので怪我人は出なかつたが、もしもこれが頭の上にも落ちたとしたら怪我だけではすまなかつたに違いない。

「ほんとにしつかりしとくれよ。頭にでも当つたら死んじやうよ、お前さん」

大道具の頭は注意されて、

「どうもすみません。一体、誰があんなへまな縄をかけやがつたか……」

としきりに頭を搔いた。

舞台裏における大道具方の権力は大へんなものだつた。新橋芸者なんか屁とも思わない、というのが、江戸ツ子気質の彼らの誇りでもあつた。ここでは大臣だつて威張らせねえ、というのが彼らの口癖だ。十分の幕間に上手に移動したり下手に走つたりする芸者たちも、うつかりすると大道具の柱や板で胸をつかれて転ばされたり、顔を叩かれることも間々あつた。